脱　帽

―大橋力『音と文明』に寄せて―

　大橋はいまなお氷壁を攀じ登っている。見上げた事だ。

　昔、学生時代の彼は、音楽においては群を抜いた水準にあり、バラの栽培も心得ているなど繊細な趣味人であった。話し好きで、寮では他の部屋をよく廻っていた。

やがて中堅の研究者としての彼の鋭利な発見が新聞などで紹介されるようになり、その相貌も、かつての柔和さが消え、恐いほどきつくなっていて、学者として真剣勝負に過していることを窺わせるようになっていた。

ただ山城組や民俗音楽の分野については、私は趣味の継続であろうぐらいに想像していたし、彼は二刀流の使い手らしい。単純にそんな風に思ってもいた。

だからこのたびの著作には驚愕した。壮大な文明論が展開されている。並みの学説ではない。膨大なフィールドワーク調査と理工的実証解析で有無をいわせぬ根拠を細密につくりながら、哲学の歴史の土俵も踏まえて論述は手堅く、これら広域な研究から生み出された発想は卓抜に思われ大変刺激的である。

　全編にすごい緊張感がみなぎり、通例の文明論とは違い気楽には読めない。とくに自然科学の知力のない私には理解力の超える頁がたくさんあった。それでもあちこちに散りばめられているおもしろい知見に助けられてともかく通読した。そしてそれまでの私の漠然とした感想と同じようなことが最後の「結びの論考」にまとめられていたので嬉しかった。

　重要な文献となるのではなかろうか。大橋は一つの高峯を極めた。

しかもこれから先も老熟の能役者などに見習ってずっと活動を維持する姿勢を宣明している。この意欲もまた、サラリーマンがいち早く定年を迎えさせられ、学者もまた相撲取のように寿命が短いと評されるこの国の風土にあって、型破りである。

若い日のあの遊泳する精神が彫琢を重ね強靭となり雄飛していることに心から敬意を表したい。

（2003 年 12 月）